



HP



Facebook



随時更新しています
のでご覧ください。

自分自身の人権感覚を磨いた後期人権教育月間

10月28日(月)から11月29日(金)まで後期人権教育月間として、各学年で学習をしてきました。月間の導入として、学校長から「If I must die～平和への願い～」という話がありました。また、各学年の学習からも、生徒たちは「私たちが生きていく上で大切にしなければならないこと」についてたくさん考えることができました。

校長講話

【校長講話】 ～If I must die～平和への願い～

はじめに1つ詩を紹介します。この詩を作ったのはガザの大学で教える無名の詩人リファト・アライール。タイトルは「If I must die (もし私が死ななければならないのなら)」。19行からなる詩ですが、最初の3行を紹介します。

If I must die,	もし私が死ななければならないのなら
You must live	あなたは生きなければならない
to tell my()	私の()を伝えるために

この()にどんな言葉が入ると思いますか？英語の方でも日本語の方でもいいので近くの人と相談してみてください。()にはこんな言葉が入ります。

If I must die,	もし私が死ななければならないのなら
You must live	あなたは生きなければならない
to tell my(story)	私の(物語)を伝えるために

今日はリファトがこの詩に込めた願い、story(物語)に込めた願いを話します。先ほどガザの詩人と言いましたが、ガザという言葉ニュースで聞かない日はないでしょう。昨年10月7日にパレスチナのイスラム組織ハマスがイスラエルに大規模な襲撃を仕掛けました。これへの報復でイスラエルがハマスの壊滅と人質の奪還を掲げてパレスチナ人の住むガザ地区への大規模な攻撃を始めてから1年が経ちました。ガザ地区は崩壊状態になり、死者は少なくとも4万3000人に上っていますが、今も激しい攻撃は続いています。

皆さん、4万3000人と聞いて大変な数だと思うけれど、どこかピンとこないですよね。それは数字を見ているからです。例えば、自分の家族や知っている人が亡くなった時1人が亡くなっても本当に悲しいですよね。それは亡くなった方の人生や物語を知っていて、そこに自分もかかわっているからです。だから悲しみが自分事なのです。新聞にお悔やみ欄(亡くなった人の名前の欄)がありますが、ほとんどその方の物語を知らないで、悲しいという気持ちはそこまで起きてきません。

だからリファトはここに力を入れたのです。ガザでたくさんの人が亡くなる中で、家族を失った悲しみ、戦争を生き延びた体験など、一人一人の物語を読み物にし、出版してきたのです。このように物語ることがリファトのできる抵抗の手段でした。彼は人生の大半をパレスチナの物語に、そして、大学で若者たちの言葉を育てることに捧げようと決意しました。学生たちには「失った命や生き残ったことの重み、そして希望の物語を語るために私たちはここにいるのだ」と伝えました。

また、リファトは次のようにも言っています。「私は学者で、家にある武器はペンだけです。もしイスラエル兵が私たちの家に押し入り、ドアを開けて虐殺を始めたら、私はそれを彼らに投げつけるでしょう。それが私にできる最後のことだったので」

しかし、イスラエル側を批判するこういう発言が、リファトを追い込んでいきます。メディアやSNSで発信を続ける彼の元には、脅迫のメッセージが届きはじまりました。自宅は破壊され、避難生活を送るようになっていました。このような過酷な日々の中で、リファトが投稿したのが「If I must die」でした。その一カ月後、2023年12月6日、イスラエル軍の空爆が、リファトの避難先を直撃し、44歳でその生涯を終えました。「If I must die」は、その死の知らせと共に世界に拡散しました。世界の各地で人々は彼のために祈りを捧げました。それこそ彼が望んでいたことなのです。リファトの言葉は、彼を殺した武器よりも強力に鋭かったのです。

19行の詩の最後の3行です。

If I must die	もし私が死ななければならないのなら
let it bring hope	それが希望をもたらしますように
let it be tale	それが物語となりますように

今日はリファト・アライールという無名な詩人の物語を話しました。映像があるので見てください。(動画)

今も世界では戦いの中でかけがえのない命が奪われています。私たちに何ができるのでしょうか。あるクラスの学級通信に、次の言葉を見つけました。

「世界中に平和が訪れるために私たちができることは何だろう。それは、世界の現状に関心を持ち続けること。そして、身近な所に憎しみや差別のない人間関係を創り上げること。○組から実現するんだ!ノーモア・イジメ!ノーモア・サベツ!そして LOVE & PEACE(愛と平和)」

ちょうど今は後期人権月間です。いじめや差別のない南宮中を目指しましょう。そして、平和な世界を祈りましょう。

後期人権教育月間における各学年の学び

< 1 学年 >

日頃から自分を大切にすることや他人の立場に立って考えられる力の育成と同時に、個別的な視点からのアプローチ（今回は、障がいのある方に対する人権感覚「差別に気付く」「差別する心に負けない」「差別を無くす実践力」）の向上を目指しました。

具体的には、障がいのある方の体験談の読み物資料を入り口にし、障がいに関わる疑似体験（車いす体験、アイマスク体験、高齢者疑似体験）や点字・手話などの体験活動を通して、障がいに対する理解を深め、障がいのある方により良い接し方ができるようにすることを目的として学習しました。

【生徒の感想から】

- 私は、障がい者の方にとって周りの人の助けや協力が必要なのだと思います。そして私は「障がい者だから助けてあげるのではなく、困っているから助けてあげる」というものを大切にしたいと考えました。
- 私は車いす体験をした。（中略）体験が始まると意外に楽しくなった。でも、その楽しさはすぐに消えた。いつもなら普通に歩ける段差も、通るのに時間がかかる。ろう下に置いてあった段ボールも車いすに乗っていたらそれがじゃまな障害になる。車いすに乗っている人の気落ちを考えたら、楽しいなんて思うのは失礼だと思った。車いすに乗る人の気持ちを考えたら、きりが無い。みんなができることができないのは苦しくてつらいと思う。でも、一番つらいのは、それを笑われてしまったり、かわいそうと言われることがあることなんじゃないかと思う。

< 2 学年 >

人権教育月間を通して、「部落差別をなくすのは、私たち」ということについて考えました。

教科書「あけぼの」を用いて、「ケガレについてどう思うか」「なぜ人々は差別をしたのか」について考えました。差別の起源について正しい知識や歴史の中で「なぜ幕府や藩が差別を強化したのか」等について学んだり、DVD を視聴し、差別された人々が実はその時代の文化を支えていたことや近代医学の基礎を築いてきたことを学んだりしました。これまでの中で差別と必死に闘ってきた人の苦労や勇気を知ることで、「これから自分は人権問題に対してどう行動していきたいか」という問いに対して、自分なりの考えを持つことができました。

【生徒の感想から】

- 昔は、差別することを義務付けられ、差別されることを強要されていた人がいたけれど、その人たちは差別されながらも諦めずに闘ったおかげで、結婚する人がでてきたので、今も差別について考えることを諦めてはいけなかった。
- 昔は自分とは違う人を差別したり、死に関わる仕事が気持ち悪いと言われたり、今やっていると褒められるような仕事をしている人たちのことさえも、差別していたと考えたらやばいと思いました。これからも差別は完全にはなくなるかもしれない。けど、一人一人が考えて行動していけば、少しはなくなると思いました。

< 3 学年 >

前期に学習した部落差別問題（全国水平社・草つき穴・日野覚醒会）の振り返りをし、結婚する際に起こりうる部落差別、現在も残る部落差別問題（結婚問題）を扱ったビデオ「私が歩んだ道～差別の中を生きて～」を視聴しました。生徒たちは、部落差別が他人ごとではなく、自分自身にも関係があることを学び、これから生きていく上で何が大切なのか一人一人が考えることができました。

【生徒の感想から】

- 「どうして差別をしてはいけないの？」と聞かれても、多分私は答えることができなかったと思います。ですが、部落差別について学び、差別を受けていた人たちがどんなに苦しくつらい思いをしていたのかを知り、差別は人に一生の傷を負わせる恐ろしいものだと分かりました。差別は絶対にしてはいけないと学びました。
- 「差別」は人々の心の中に無意識にあると思うから、差別は完全になくなるものではないと思う。けれど、人々のちょっとした意識が変わっていくのなら、「差別」に対しての理解を深めていくことが大事だと思った。
- 部落差別は昔にしかなかった差別だと思っていましたが、最近まであったということを知りました。そして、周りから忘れられてしまうという心配があるなど考えました。もしかしたら今も私の知らないところで差別が続いているかもしれません。部落差別が続かないようにするためには、部落差別がどんな差別で、人生にどれだけ傷をつけるかを知る必要があると思います。
- 部落差別という言葉が消えず、今もなお続いている世の中で、被差別部落の学習をし、それを広げてつないでいくことで、少しでもこのような思いをする人達がいなくなればいいと思います。
- その場所に生まれたというだけで差別されるというのは、あってはならない事です。これからも僕たちは、差別について考えていかなければならないと思いました。

かんてんぱぱ SBC こども音楽コンクール県大会優秀賞！ 12月21日に長野県の代表として東日本優秀演奏発表会に出場！

音源での1次審査を通過し、9月29日(日)に、長野市芸術館で行われた「かんてんぱぱ SBC こども音楽コンクール県大会」に出場し、優秀賞をいただきました。そして、その後行われた選考会にて南宮中合唱部が「東日本優秀演奏発表会」への出場を推薦されました。

現在、今週末の演奏会に向けて、最後の調整を頑張っています。東京にあるパルテノン多摩のホールで、3年生との最後の演奏となる「聞けよ、ひばり」を思う存分楽しみ、最高の歌声を響かせてください！

個人情報保護の観点から、写真は削除してあります。